

教職演習Ⅱ授業報告 第2報

自主勉強時間を増やす試みと学修成果

星川佳広*

1 本報告の背景と目的

教職演習Ⅰ～Ⅵは、スポーツ教育コースの学生を中心対象とした教員採用試験（以下、教採）対策の演習科目である。その中で私が担当するのは2年次春学期の教職演習Ⅱであり、Ⅰ～Ⅵある教職演習の中では、教採の一般教養問題対策として位置づけられている。

本報告は、昨年度の報告（星川，2016）の続報である。私が教職演習Ⅱを再担当することになって今年が2年目であるが、本報告では、授業目標として掲げた「本学生に不足する絶対的な勉強量の確保」を目指した過程で、2年越しでより確度をもってわかる学生の自主勉強に対する意識や動向についてまとめる。また、昨年度からの授業内容の改良点が学生の勉強時間に及ぼした影響や、昨年度は含められなかった本授業を受けることによる学修成果についても触れる。

本報告のために行った調査は昨年度とほぼ同様で、授業内に4回行った復習小テスト（以下、確認テスト）ごとに、①確認テスト前1週間における一般教養に関する平均的な1日当たりの自主勉強の時間、②確認テスト前日の一般教養に関する自主勉強の時間、および③最終週（15週目）に実施した自主勉強時間に関するアンケート調査であった。①を日常的な勉強時間、②をテスト前日の勉強時間としてまとめた。アンケート調査の内容は昨年度報告（星川，2016）と同一であり、本人の意識（教員になる意思や自信、学力レベルの自己判断、勉強の必要性の認識、問題難易度の感覚）、高校時の家庭学習状況、入試種別と出身高校ランク、および自主的な勉強時間を増やせない理由等であった。

以下の構成は、授業内容（第2節）、履修生の特性（第3節）、自主勉強時間の推移（第4節）、自主勉強時間に影響する要因（第5節）、学修成果について（第6節）、所感（第7節）である。

2 授業内容

2.1 シラバスおよび方針

授業の割り当ては昨年度同様、火曜5時限であった。シラバスは図1の通りであった。昨年度よりも自主的な勉強時間の確保の重要性、特に“毎日（日ごろ）”の勉強時間を確保することの重要性を強調し、それをシラバス内の授業方法にも明記した。昨年度、定期試験が近づいてようやく勉強し始めるという学生動向が明らかになったため、今年度は、評価において定期試験の配分を50%から20%へと大幅に削減し、その分、授業内に行う確認テストにおける配分を35%→80%へと大幅に高めた。そのことで、日ごろからの自主勉強の取り組みの重要性を強調した。

* 東海学園大学スポーツ健康科学部

科目名	教職演習Ⅱ	単位数	1.0	学年	2
担当者氏名	星川 佳広				
授業概要	教員採用試験(一次)で扱われる一般教養の過去問を解き、理解を深めることで、一般教養の知識増加を図るとともに、採用試験試験に出題される問題の傾向と対策を研究・実践する。本学部生に不足する絶対的な勉強量を確保し、教師になった場合に求められる向上心や勉強の学習方法を身につける。それらの教育効果の向上のために定期的に知識習得の現状をチェックする。				
到達目標	(1)一般教養を学習しつつ、模擬試験などで自身の知識習得状況を把握し、各自の教員採用試験に向けた積極的対策・姿勢を構築することができる。 (2)保健体育教諭としての倫理観・使命感・責任感を身につけ、自分を律して行動し、何事にも誠実に精一杯の力で取り組むことができる。また、互いに教え合い、協力し合って学習を進めることができる				
授業計画	1週 オリエンテーション(教職演習Ⅱの概要、目標)、過去問テスト [予習・復習1週]過去問テスト 2週 一般教養(英語・数学・総合問題)の傾向と対策1 3週 一般教養(英語・数学・総合問題)の傾向と対策2 4週 一般教養(英語・数学・総合問題)の傾向と対策3 [予習・復習2-4週]指定課題 5週 第1回確認テスト [予習・復習5週]確認テスト 6週 一般教養(その他の教科)の傾向と対策1 7週 一般教養(その他の教科)の傾向と対策2 8週 一般教養(その他の教科)の傾向と対策3 [予習・復習6-8週]指定課題 9週 第2回確認テスト [予習・復習9週]確認テスト 10週 東海地区(愛知、名古屋、三重)の一般教養の傾向と対策1 11週 東海地区(愛知、名古屋、三重)の一般教養の傾向と対策2 [予習・復習10-11週]教科書内東海地区の過去問 12週 第3回確認テスト [予習・復習12週]確認テスト 13週 関東地区(静岡、神奈川、埼玉など)の一般教養の傾向と対策 14週 関西地区(大阪、京都、滋賀など)の一般教養の傾向と対策 [予習・復習13-14週]教科書内関東地区、関西地区の過去問 15週 第4回確認テスト [予習・復習15週]確認テスト				
授業方法	過去問を解きながら一般教養の絶対的な知識量を増やす。演習前半は各教科ごとに、後半は都道府県別に問題を解く。教員採用試験合格に向けて毎日の自主学習の確立を図る。予習課題に対しては、担当学生が解答解説を行う(プレゼンテーション)。確認テストは4回を予定し、その結果は返却し弱点を中心に解説をする。予習・復習の徹底のためノートの確認も行う。				
履修上の留意事項	[準備・予習] 毎回、指定された問題を各自で解いたうえで授業に参加すること。また、1年次の「教職演習Ⅰ」で使用した一般教養問題の復習をしておくこと。 [復習] 授業内で扱った問題を繰り返し解き、自らが解説できるレベルまで理解を深めること。また、教科書、参考書内の他府県の似た問題を解くことで、応用力を高めること。				
教科書	『一般教養の過去問2018年度版』(時事通信出版局)				
参考図書・参考URL	『2017年度教員採用試験対策 セサミノート2 一般教養』東京アカデミー 『一般教養の過去問2017年度版』時事通信出版局 『一般教養の演習問題2018年度版』時事通信出版局				
評価の方法・評価基準	定期試験(20%)、確認テスト(70%)、教職志願者としての受講態度(10%)から総合的に評価する。				

図1 シラバス

2.2 授業概要

2.2.1 授業展開

第1週目は、日ごろからの自主勉強時間の確保を学生に意識付けるため、

- ・ 4回の確認テストを実施すること、およびその評価配分が80%であること
- ・ 第2-9週目に用いる授業内課題を印刷、配布し、予習課題として指示(図2)
- ・ 予習、自主勉強用のA4サイズ大学ノートの配布

- ・ 出席記録を兼ねて毎回ノートに、押印すること
 - ・ ノート提出（ノートチェック）があり、その内容を評価に含めること
- 等を説明した。

また、学生の意識覚醒のため、昨年度の愛知県の教採一般教養問題（16問）を事前テストとして実施した（ただし、評価には含めない）。その結果は、平均（後述する準備してきた2名を除く）で16点満点中3.9点しかなく、事前テスト後の感想欄には多くの学生が勉強の必要性をコメントした。

第2週目以降においては、2～3週の授業を行ったら、その間の授業内容について確認テストを実施するというサイクルであった。

- ・ 第1サイクル 2－4週目（英語、数学）＋5週目（第1回確認テスト）
- ・ 第2サイクル 6－8週目（数学確率、理科、社会、その他）＋9週目（第2回確認テスト）
- ・ 第3サイクル 10,11週目（名古屋、愛知、三重の教採過去問2年分）＋12週目（第3回確認テスト）
- ・ 第4サイクル 13,14週目（静岡、千葉、神奈川、埼玉、大阪、京都、京都市、滋賀の過去1年分）＋15週目（第4回確認テスト）

第1,2サイクルは、各都道府県の過去問より頻出問題を抽出し、英語、数学など科目ごとにまとめて予習課題として準備（図2）し、授業前に実施したうえで授業に参加するよう指示した。そして、授業内にてその解答および解説を行った。第3,4サイクルでは、教科書指定した「一般教養の過去問（2018年度版）、時事通信出版局」および教材フォルダ教職センター内にある教採過去問を予習課題とし、授業内でその解答解説を行った。授業においては、予習課題や教採過去問に対して事前に担当学生を指名し、解答例を板書、口頭で行わせながら、解説を加えた。

確認テストの問題は、授業で扱った問題そのものを中心としたが、学生の記憶による回答を避けるため、問題の一部を部分的に修正して出題した。昨年度、学生は問題が「難しい」と感じると勉強しなくなる傾向が見られたことから、学生の“やる気”を持続させる狙いで今年度はより容易な問題を中心に問題を出題した。また、確認テスト翌週には、採点結果と各設問の正答率を返却し、正答率が低い問題を中心に再度の解説を行った。昨年度は学習到達状況の遅れから確認テストは3回になったが、今年度はシラバスどおりに進み4回の確認テストを実施できた。

さらに、第2,4サイクル後には、ノートを提出させて、予習の実施状況のチェックを行い、ノートにコメントおよび優、良、可の評価を記載して2日以内に返却した。

2.2.2 予習課題

第1,第2サイクルに用いた予習課題（図2）は、昨年度の報告に基づき、問題を一部入れ替え改良した。そのポイントは、

- ・ より基本的な問題を中心にした（簡単にした）。
- ・ 問題を解くためのヒントを加筆した。←学生は「難しい」と感じると勉強しない傾向にあったため
- ・ 別票に答えを示した←予習において答えがすぐに分からないとやる気がしないという意見があったため
- ・ 予習を実際に行うべき日程を入れた←学生に毎日の勉強時間の意識をもたせるため（図2内「予習日4/14」など）
- ・ 設問に関連し、発展的に調べたほうが良い内容を記した（図2内「それぞれの貿易の時代、特徴を調べよ」「幕末の開国から大政奉還までを整理しよう」など）←多くの学生は、問題にもとづき関連する知識までもを調べて理解を深めることや、ノート作りができていなかったため。

また、昨年度散見された予習方法「課題丸写し」については“効果がない”、“意味がない”ことを伝えた。その結果、課題丸写し法にて予習を行ったノートは今年度は見られなかった。

2.2.3 定期試験

定期試験の範囲は、昨年度は授業内で扱ったことすべてとしたが、今年度はそれを変更し、授業で扱わなかった都道府県を含め教科書(一般教養の過去問(2018年度版))すべてとした(図3)。その理由は、実際の教授では出題範囲が限定されているわけではなく、教科書すべて(範囲はほぼ無限)とした方がより学生の実力を反映させられると考えたからであった。また、そうすることで事前テストから定期試験の得点率変化を、本授業に参加したことの学修効果の評価指標とするためであった(第6節)。

ただし、学生から範囲が広すぎると「やる気がしない」という意見が出たため、定期試験の問題作成に利用した以下の24の都道府県名を最終週(15週目)に公表した。しかし、24の都道府県で扱われている学習範囲はきわめて広いので、定期試験はほぼ実力テストであったと判断する。

北海道、青森県、山形県、埼玉県、静岡県、山梨県、富山県、石川県、福井県、愛知県、名古屋市、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、神戸市、兵庫県、鳥取県、島根県、愛媛県、香川県、高知県、長崎県、沖縄県

数学

I. 数、式の計算、方程式

予習日 4/14

問題-1 神奈川県 2012

次の(ア)～(エ)の各文を読んで、正しく述べている文の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

(ア) $2-1 \times (-3)^2$ を計算すると、9になる。

(イ) $a = \sqrt{2+\sqrt{3}}$ 、 $b = \sqrt{2-\sqrt{3}}$ のとき、 $a^2 - b^2$ の値は、 $-4\sqrt{6}$ になる。

(ウ) 濃度6%の食塩水が100gある。これに100gの水を加えると、食塩水の濃度は3%になる。

(エ) $x^2 - 2x - y^2 + 2y$ を因数分解すると、 $(x-y)(x+y-2)$ になる。

ヒント

(イ) $a^2 - b^2 = (a+b)(a-b)$

(ウ) 食塩水の濃度(%) = 食塩量/食塩水の重さ \times 100

食塩水の重さ(g) = 食塩量(g) + 水の重さ(g)

① (ア)と(ウ) ② (ア)と(エ)

③ (イ)と(ウ) ④ (イ)と(エ)

⑤ (ウ)と(エ)

予習日 5/17

問題-3 名古屋市 2015

平家(平清盛)は、中国と貿易を行い大陸との交流を盛んにした。この貿易を一般に何と呼ぶか?

①日宋貿易 ②朱印船貿易 ③日明貿易 ④南蛮貿易 ⑤勘合貿易

それぞれの貿易の時代、特徴を調べよ

予習日 5/17

問題-4 神奈川県 2012 (参考 教科書p54(3))

次の(ア)～(エ)の各文は、江戸時代後期の主なできごとについて述べたものである。できごとを年代の古い順から並べたものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

(ア)安政の大獄がおこる。 (イ)薩英戦争がおこる。

(ウ)日米修好通商条約が締結される。 (エ)異国船打払令が出される。

幕末の開国から大政奉還までを整理しよう。桜田門外の変、生麦事件、下関戦争、不平等条約など。

① (ア)→(ウ)→(エ)→(イ) ② (イ)→(ア)→(エ)→(ウ)

③ (ウ)→(エ)→(イ)→(ア) ④ (エ)→(ア)→(ウ)→(イ)

⑤ (エ)→(ウ)→(ア)→(イ)

図2 予習課題例

教職演習Ⅱ (担当 星川)
定期試験問題
2017 年春学期

問1. 鳥根県

ア~エにおいて、下線部と同じ漢字を選んで正しいものを下表の①~⑤から選べ。

ア 表情が辺々なる
 A ケンロウなつぐりの建物 B コユウ名詞 C キョウコウ派の意見
 イ 成功をオサめる
 A 単位をリシユウする B 税金をベンノウする C 事態をシユウシユウする
 ウ シンキを一転して励む
 A 人情のキビを表現する B キブンを害する C キハン意識が高い
 エ 彼の人柄はホシユウする
 A 車がコシユウする B 卒業シユウシヨ C 費用をベンシユウする

①	ア	イ	ウ	エ
②	ア	イ	ウ	エ
③	ア	イ	ウ	エ
④	ア	イ	ウ	エ
⑤	ア	イ	ウ	エ

問2. 京都府

次のア~オは、慣用句とその意味を説明したものである。内容が誤っているものの組合せはどれか、下の①~⑤から一つ選びなさい。

ア 「流れに棹さす」 機会をつかんで時流にのる。物事が順調にはかどる。
 イ 「潮時」 物事をするのにより時期を過ぎて、引き下がる時。
 ウ 「情けは人の為ならず」 情けをかけておけば、巡り巡って自分によい報いが来るとのこと。
 エ 「煮詰まる」 議論・相談などが行き詰まって、結論が出ない状態になる。
 オ 「気が置けない」 気遣いする必要がない。遠慮がない。

図 3 定期試験問題の一部

3 履修生の特性

今年度の履修生の人数は、男子 19 名、女子名 11 名の合計 30 名であり、昨年度の 43 名から減少した。以下では、昨年度 (2016) の報告 (星川, 2016) と比較しながら今年度 (2017) の履修生の特性をまとめる。

3.1 入試種別 (表 1)

一般入試、センター利用入試を合計すると、今年度は 46.7%であった。一般入試での入学生の割合が昨年度と比較して大幅 (23.3 → 40.0%) に増加した。その分だけ、AO 入試、アスリート推薦、公募推薦による入学生の割合は低下した。

表 1 各入試種別の人数および割合

	AO 入試	指定校推薦	アスリート推薦	公募推薦	一般入試	センター利用
2016	5 (11.7%)	9 (21.0%)	6 (14.0%)	9 (21.0%)	10 (23.3%)	4 (9.4%)
2017	1 (3.3%)	10 (33.3%)	1 (3.3%)	4 (13.3%)	12 (40.0%)	2 (6.7%)

3.2 出身高校の入試ランク (表 2)

出身高校の入試ランクは昨年度とほぼ同じであった。C1、C3 が 23.3%で最も割合が高かった。B1 は昨年度同様の 20.0%であったが、これは本学部全体における B1 の割合 (14 ~ 16%、2013 - 2015 年度入学生) よりやや高い傾向にあった。

表2 出身高校の入試ランク別の人数および割合

	A 1 or A 2	B 1	C 1	C 2	C 3	D 1	E 1 or なし
2016	1 (2.3%)	10 (23.3%)	10 (23.3%)	10 (23.3%)	9 (20.9%)	2 (4.7%)	1 (2.3%)
2107	2 (6.7%)	6 (20.0%)	7 (23.3%)	5 (16.7%)	7 (23.3%)	2 (6.7%)	1 (3.3%)

3.3 高校時の家庭学習状況 (表3)

「テスト前のみやっていた」が、53.3%と約半分で最も多く、昨年度 (37.2%) と比較しても高かった。その分だけ「2-3日に1回」が13.3%と昨年度 (23.3%) と比較し減少した。「ほぼ毎日行っていた」は16.7%と昨年度 (18.6%) とほぼ同じであった。

表3 高校時の家庭学習状況別の人数および割合

	ほぼ毎日やっていた	2-3日に1回程度やっていた	週に1回程度やっていた	テスト前のみやっていた	ほとんどしていなかった
2016	8 (18.6%)	10 (23.3%)	3 (7.0%)	16 (37.2%)	6 (14.0%)
2017	5 (16.7%)	4 (13.3%)	3 (10.0%)	16 (53.3%)	2 (6.7%)

3.4 教員になる意思 (表4)

今年度は、「どうしても先生になりたい」は33.3%と昨年度の46.3%から減少した。しかし、「できれば先生になりたい」をあわせると、今年度も66.6% (昨年度67.4%) であり、教職希望の強い学生が履修していたと考えられる。ただし、今年度は昨年度0人であった、春学期15週目において「半ばあきらめている」と回答した履修生が5名存在した。

表4 教員になる意思別の人数および割合

	心底からどうしても先生になりたいと思っている。	できれば先生になりたいと思っている。	心配はあるが、やれるところまでやってみたい	先生になることは、半ばあきらめている
2016	20 (46.5%)	9 (20.9%)	14 (32.6%)	0
2017	10 (33.3%)	10 (33.3%)	5 (16.7%)	5 (16.7%)

3.5 教員への自信、学力レベルの今後の見通し (表5)

教員への自信に関しては、昨年度とほぼ同じであった。すなわち自信があるものは数名、半数 (53.3%) は自信と心配が半々の状況であった。

表5 教員への自信等の人数および割合

	そのつもりでやっているのだから、当然自信はある	自信と心配が半々と言うのが実状だ	多分難しい。しかしやれるところまでやってみたい	無理だと思う。あきらめている	NA
2016	2 (4.7%)	24 (55.8%)	14 (32.6%)	1 (2.3%)	2 (4.7%)
2017	3 (10.0%)	16 (53.3%)	10 (33.3%)	1 (3.3%)	0

3.6 学力レベルの自己判断 (表6)

学力レベルの自己判断についても、ほぼ昨年度と同様であり、自分自身をA、Bランクと考える学生はおらず、Dランクと考えるものが最も多かった (53.3%)。

表6 学力レベルの自己判断別の人数および割合

	A ランク	B ランク	C ランク	D ランク	E ランク
2016	0	0	9 (20.9%)	27 (62.8%)	7 (16.3%)
2017	0	0	7 (23.3%)	16 (53.3%)	7 (23.3%)

3.7 勉強の必要性の認識 (表7)

自主的な勉強の必要性は、1名を除き全員(96.7%)が“もっと必要”だと感じていた。これは昨年度と同じ傾向であり、勉強の必要性は認識しながら、様々な理由により実際にはできていない現状が示唆される。

表7 勉強性の必要性の認識別の人数および割合

	自主的な勉強がもっと必要だと感じている	自主的な勉強の必要性は感じるが、今はまだやらなくてよい(上級生になったら取り組む)	自主的な勉強の必要性をあまり感じない	どちらともいえない。よくわからない
2016	37 (86.0%)	6 (14.0%)	0	0
2017	29 (96.7%)	1 (3.3%)	0	0

3.8 教採問題の難易度の感覚 (表8)

「非常に難しい」「難しい問題が多い」を合わせると、昨年度は79%、今年度は73%と、多くの学生が教採問題は難しいと考えていた。ただし、今年度は昨年度は0名であった「多くの問題は簡単でいたい解ける」と回答したものが3名いた。このうち2名は、実際に成績も良かった。

表8 教採問題の難易度の感覚別人数および割合

	多くの問題が簡単である	難しい問題もいくつかあるが、多くの問題は簡単でいたい解ける	難しい問題と簡単な問題が半々である。自分の学力レベルにちょうど良い	難しい問題が多いが、自分で解ける問題もいくつかある	非常に難しい。自分の学力レベルを超えた問題がほとんどである
2016	0	0	9 (20.9%)	25 (58.1%)	9 (20.9%)
2017	0	3 (10.0%)	5 (16.7%)	17 (56.7%)	5 (16.7%)

4 自主勉強時間の推移

図4に一般教養に関する自主的な勉強時間の履修生全体の平均を示した。図4左が日常的な勉強時間で、図4右が確認テスト前日の勉強時間である。日常的な勉強時間については、昨年度は第1回確認テスト時にほぼ0時間であったものが、今年度は第1回確認テスト時において0.5時間を越えていた。昨年度は確認テストごとに日常的な勉強時間が増加した(ただし、0→0.5時間程度)ので、今年度もその後上昇することを期待したが、春学期を通しほぼ変化ないか、むしろ低下する傾向にあり、定期試験前にわずかに増加するまでであった。定期試験前になって少しだけ日常的な勉強時間が増える傾向は昨年度と今年度で同じであったが、それでも平均としては1時間未満でしかなかった。

テスト前日の勉強時間としては、確認テスト前が約1時間で、定期試験前には2時間程度であり、これについても昨年度とほぼ同じであった。すなわち、本学生の特徴としては、15週内に行う小テスト、および定期試験に対して、平均的にはこの程度の時間を勉強する(それ以上はしない)と考えられる。

テスト前日の勉強時間で着目される点として、第3週目に平均値がわずかながら下がる傾向である。この傾向は昨年度も第3回確認テスト時に見られていた。この理由として推測されることは、確認テスト（復習小テスト）も3回目となると、学生の緊張感が持続しないことが考えられる。

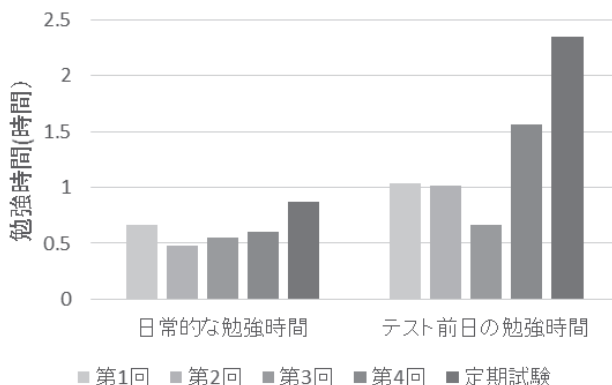


図4 一般教養に関する自主勉強時間の履修生平均

図5には図4の内訳をより詳細にするため、勉強実施時間が、0時間、30分以内、30分～1時間以内、1～2時間以内・・・の該当人数の推移を示した。日常적인勉強時間（図5左）については、春学期を通して0時間と30分以内が60～80%を占めた。これは昨年度もほぼ同様な結果が得られており、学生の大半は、毎日まとまった時間をとって勉強するという習慣がもたない（もてない）ことが伺える。一方、昨年と異なった点は、少数ながら当初より日常的に1時間以上勉強する学生が存在したことであった。第1回確認テスト時における日常적인勉強時間（図4左）の平均が、0.5時間を越えていたのは、この学生らの存在のためであった。

一方、テスト前日の勉強時間（図5右）は、これも昨年同様、第1～3回の確認テストでは30分以内が40-60%を占め、約半数の学生はテスト前であってもほとんど勉強しない—まとまった時間をかけて勉強しない—実態が明らかになった。一方、第4回、定期試験前になると80%以上が2時間以上勉強していた。これも昨年同様の結果であった。

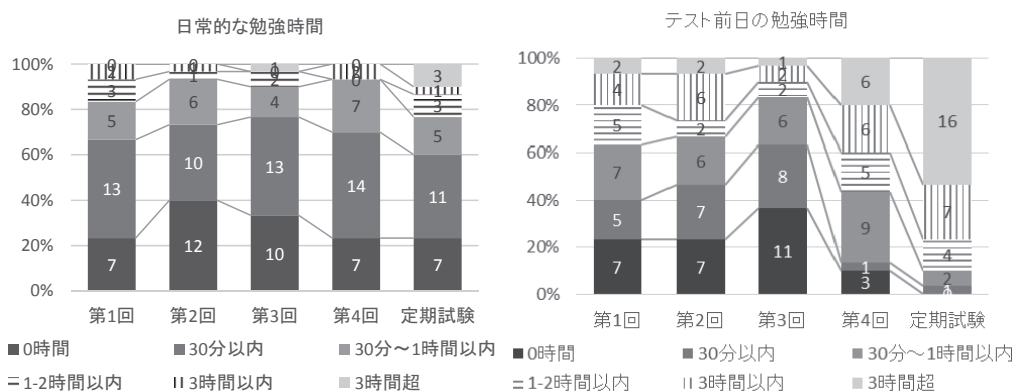


図5 一般教養に関する日常적인勉強時間（左）とテスト前日の勉強時間（右）の人数

5 自主勉強時間に影響する要因

各学生につき、春学期を通しての一般教養に関する自主勉強量の多寡の指標（以下、総合的な勉強時間）を得るために、日常적인勉強時間とテスト前日の勉強時間すべての平均値を算出し、利用した。そして

その平均値が1時間15分以上の7名（日ごろから勉強を行う、あるいはテスト前にはまとまった時間をもって勉強する群）、40分～1時間15分の14名（日ごろの勉強はわずかにするか、テスト前に1時間程度勉強する群）、40分未満の9名（日ごろの勉強はほとんどしない、テスト前にわずかに勉強するかそれさえもしない群）の3群に分けて、以下の分析を行った。

5.1 入試種別（表9）

分析対象人数が少ないため、入試種別にははっきりした傾向はみられなかった。履修生が最も多かった一般入試による入学者12名についても、総合的な勉強時間は3群に分かれて分布しており、一般入試入学者としての特徴的な傾向は見られなかった。ただし、次に履修生の多かった指定校推薦による入学者10名では、総合的な勉強時間1時間15分以上の学生は存在しなかった。

表9 自主勉強時間と入試種別の人数

	AO入試	アスリート推薦	指定校推薦	公募推薦	一般入試	センター利用
1時間15分以上		1		1	4	1
40分～1時間15分	1		7	2	3	1
40分未満			3	1	5	

5.2 出身高校の入試ランクおよび高校時の家庭学習状況（表10、表11）

全体の傾向としては、出身高校の入試ランクが高い学生ほど総合的な勉強時間が多い傾向にあった。また、高校時に家庭学習を取り組む頻度が高い学生ほど総合的な勉強時間が多い傾向にあった。ただし、入試ランクがB1出身の学生であっても、あるいは高校時に家庭学習をほぼ毎日行っている、現在はほとんどしない（40分未満）学生は存在した。

今年度は、出身高校の入試ランクがA（A1、A2）の学生が2名おり、その2名はともに総合的な勉強時間が1時間15分以上であった。また、この2名は高校時に家庭学習を「ほぼ毎日やっていた」と回答していた。「ほぼ毎日やっていた」と回答した5名の学生の入試ランクはA2名、B1 2名、D1 1名であった。一方、入試ランクがC3の7名は全員が高校時の家庭学習は「テスト前のみをやっていた」と回答し、現在の総合的な勉強時間についても1時間15分以上の学生は存在しなかった。これらの結果は、日ごろの自主的な勉強時間には友人等の回りの影響が強いことを推測させるものである。すなわち、高校時に回りが日ごろから勉強する環境があるとその影響を受けて本人もほぼ毎日勉強し、テスト前のみにはかやらない環境であると本人もテスト前にしか勉強しない。逆にいえば、高校時にほぼ毎日勉強していたとしても、本学に入学後、勉強量の少ない友人が回りを多くを占めるようになると、当人も勉強をしなくなる危険性を意味する。

表10 自主勉強時間と出身高校の入試ランク別の人数

	A1 or A2	B1	C1	C2	C3	D1	その他
1時間15分以上	2	1	2	1			1
40分～1時間15分		4	3	3	4		
40分未満		1	2	1	3	2	

表11 自主勉強時間と高校時の家庭学習状況別の人数

	ほぼ毎日 やっていた	2-3日に1回程 度やっていた	週に1回程度 やっていた	テスト前のみ やっていた	ほとんどして いなかった
1時間15分以上	3	1	1	2	
40分～1時間15分		3	1	9	1
40分未満	2		1	5	1

5.3 教員になる意思 (表12)

「心底からどうしても先生になりたい」という強い教職希望を持つ学生は、総合的な勉強時間が多い傾向にあった。逆に、その希望が弱くなると勉強をしなくなる傾向が明白であった。その一方で強い教職希望をもちながらも、積極的には勉強しない(1時間15分未満)学生も4割いた。

表12 自主勉強時間と教員になる意思別の人数

	心底からどうしても先生になりたいと思っている。	できれば先生になりたいと思っている。	心配はあるが、やれるところまでやってみたい	先生になることは、半ばあきらめている
1時間15分以上	6	1		
40分～1時間15分	3	7	2	2
40分未満	1	2	3	3

5.4 教採問題の難易度の感覚および学力レベルの自己判断 (表13、表14)

全体の傾向としては、教採問題の難易度を「多くの問題は簡単でだいたい解ける」と感じ、学力レベルを本学の中では相対的に高く(Cランク)自己判断している学生ほど、総合的な勉強時間が多い傾向にあった。一方、学力レベルの自己判断が低く(Eランク)、教採問題の難易度を「難しい問題が多い」「非常に難しい」と考える学生は、総合的な勉強時間が少なかった。これは昨年度とほぼ同様の結果であり、「できない」と考える学生ほど勉強しないことが推測でき、勉強時間の確保には本人の意識改革から取り組む必要性を示唆する。

表13 自主勉強時間と教採問題の難易度の感覚別の人数

	多くの問題が簡単である	難しい問題もいくつかあるが、多くの問題は簡単でだいたい解ける	難しい問題と簡単な問題が半々である。自分の学力レベルにちょうど良い	難しい問題が多いが、自分で解ける問題もいくつかある	非常に難しい。自分の学力レベルを超えた問題がほとんどである
1時間15分以上		2	1	3	1
40分～1時間15分			2	10	2
40分未満		1	2	4	2

表14 自主勉強時間と学力レベルの自己判断別の人数

	Aランク	Bランク	Cランク	Dランク	Eランク
1時間15分以上			3	4	
40分～1時間15分			2	9	3
40分未満			2	3	4

5.5 自主的な勉強時間を増やせない理由

自主勉強ができない理由（複数回答可）（図6）は、昨年度とほぼ同じ傾向であった。すなわち、「忙しい」が最多で、「自分自身のやる気が低い」、「勉強の仕方がよくわからない」の順であった。また、忙しい理由について（図7）についても昨年度とほぼ同じであり、「アルバイト」、「部活動・サークル活動」が2大理由に、「他の授業の予習復習やレポート」が続いた。

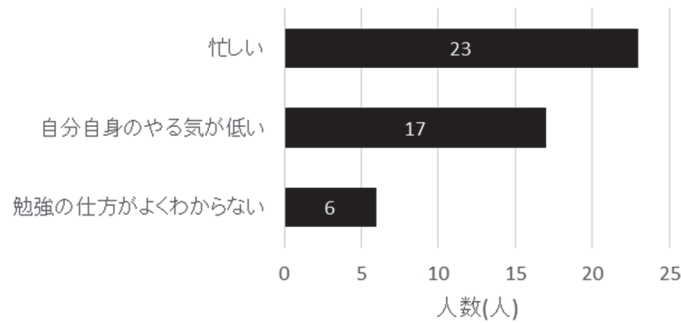


図6 自主勉強ができない理由

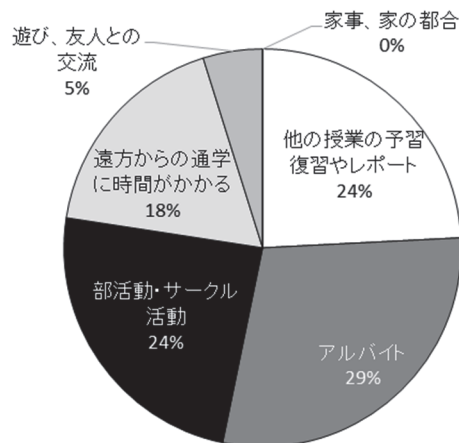


図7 忙しい理由

6 学修成果について

6.1 事前テストと定期試験の関係性

図8に、事前テストと定期試験の得点率の相関関係を示した。今年度は事前テストとして愛知県の過去問を行うことに対して準備してきた学生が2名おり、この2名は事前テストにおいても他の履修生とは異なり80%の高い正答率を示していた。そこで、この2名を除いたうえで、事前テストと定期試験の相関を取ると、相関係数は0.45であり両者には弱い相関性が見られた。すなわち、本授業の履修にかかわらず元々の学力が相対的に高い学生が定期試験でも良い得点をとることが考えられる。しかし、両者の相関は強いものではなく、取り組み次第で一般教養の学力レベルの挽回が可能ともいえる。

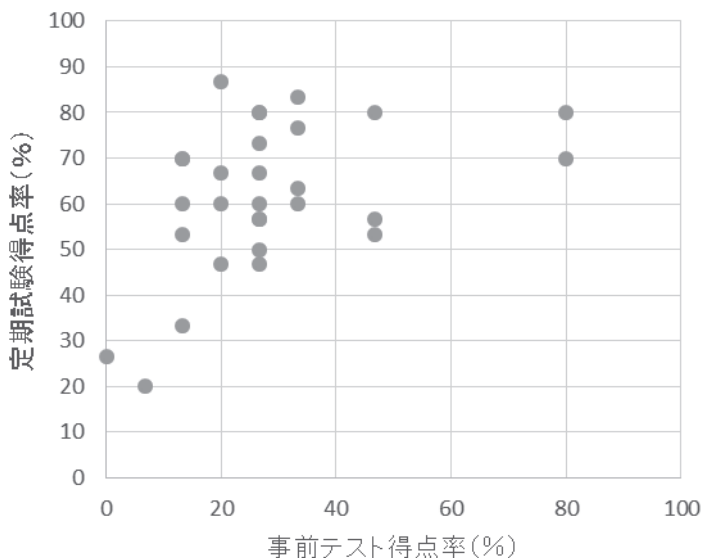


図8 事前テストと定期試験得点率の関係

図9は、全学生につき事前テストと定期試験の得点率の変化を示した。上記2名を除いた平均的な得点率は、事前テストが24.7%、定期試験が60.2%であった（平均36.5%の増加）。上記2名を除けば履修した学生全員が定期試験において事前テストよりも得点率を増加させた。最も大きく増加した学生は66.7%の増加であった。ただし、定期試験において、教採一次試験合格の目安となる70%の正答率に達したのは、33名中11名のみであった。

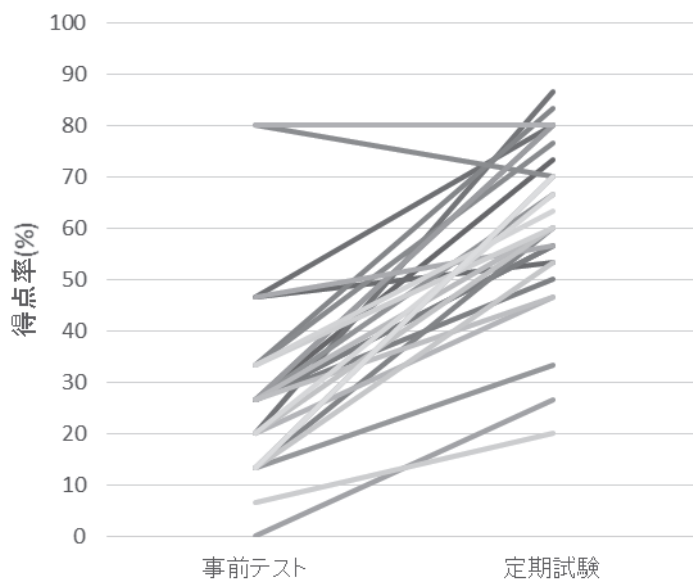


図9 事前テストと定期試験の得点率の関係（各学生）

6.2 自主勉強時間と試験結果との関係

第5節で求めた一般教養に関する総合的な勉強時間と、確認テスト（第4回）、定期試験結果との関係性を示したものが図10である。両者には係数0.56および0.43の弱い相関関係が見られた。また、図9における事前テストと定期試験での得点率の増加分と、総合的な勉強時間との関係性を示したのが図11である（上記2名を除く）。これにも係数0.40の弱い相関関係が見られた。これらの結果は、弱い関係性ながらも勉強時間の確保が確認テストや定期試験の成績に影響することを示唆するものである。

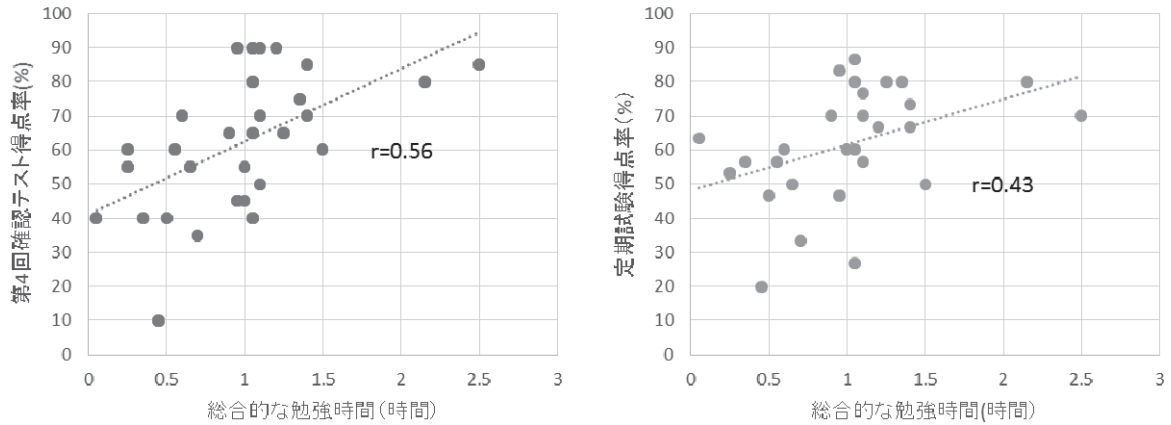


図 10 一般教養に関する総合的な勉強時間と第 4 回確認テスト（左）および定期試験結果（右）との関係

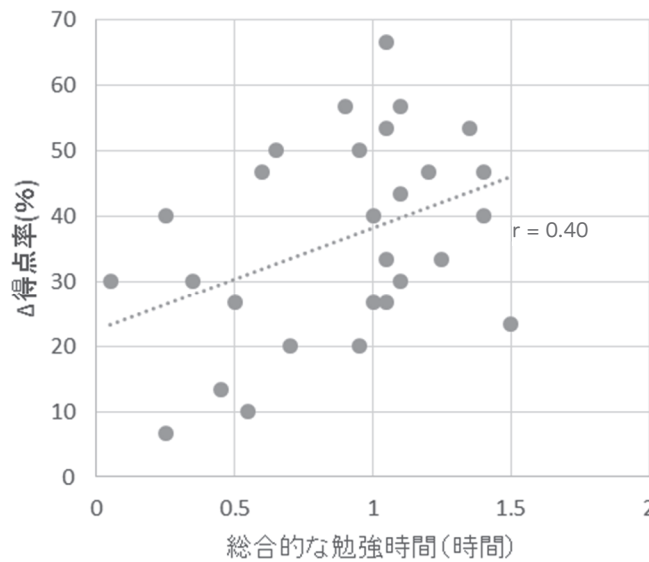


図 11 一般教養に関する総合的な勉強時間と得点率増加率との関係

6.3 数学問題の正答率の変化

今年度、下記に示す昨年度の愛知県教採に出題された数学の問題を、事前テスト、第 1 回確認テスト、定期試験と 3 回に出題した（ただし、数字は変えて出題）。その正答率の変化を示したものが図 12 である。事前テストにおいては 31.0%の学生しか正答できなかったものが、定期試験では大半（73%）が正答を示し、学生の学修効果を確認できた。

1 周 800 m の池の周りを、A、B の 2 人が同時に同地点から反対方向に走ると 50 秒後にはじめて出会い、同じ方向に走ると 6 分 40 秒後に A が B にはじめて追いつくという。このとき、A の速さ（秒速）として正しいものを選びなさい。

- ① 4 m/秒 ② 5 m/秒 ③ 6 m/秒 ④ 7 m/秒 ⑤ 8 m/秒 ⑥ 9 m/秒 ⑦ 10m/秒

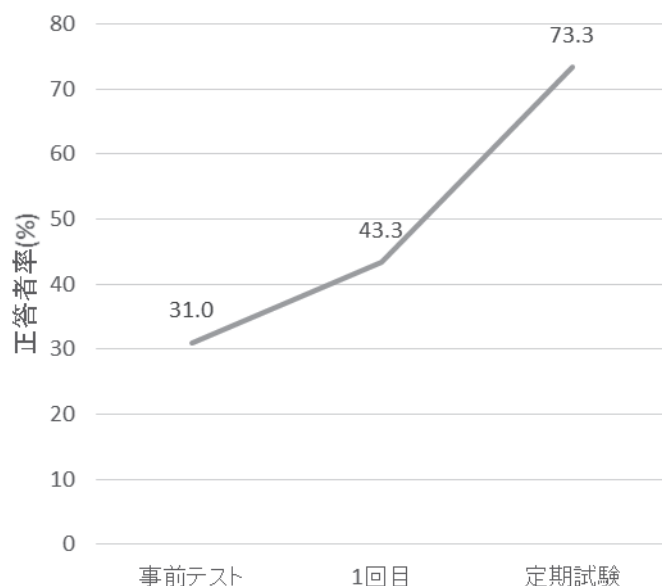


図12 数学問題の正答率の変化

ここで挙げた数学問題は、文章から2つの変数(A,Bの秒速)をとり、連立方程式をたてて($50A + 50B=800$ 、 $400A - 400B=800$) 答えを導くという教採では頻出パターンの問題である。数学の問題は愛知県を含めその他の都道府県においても、概して中学レベルの基本的で容易な出題が多い。数学以外では知らなければ正答しようがない出題があるのに対し、容易な問題が多い数学は、確実に点を取りたい設問ともいえる(愛知県は必ず1問は出題される)。本学生は「数学は見たくもない」という拒絶反応を示すこともあり、事前テストの段階では「速度×時間=距離」さえ覚束ない学生が少なくなかった。しかし、今回の調査(図12)が示すとおり、回数を重ねることで、最終的には多くの学生がその解法を理解可能なことを確認できた。

7 所感

今年度は、昨年度の調査とその考察(星川, 2016)を踏まえて、予習課題において、答えを示すこと、ヒントを入れたこと、予習日の指定をしたこと、発展的に調べる内容の明示をしたこと等を行った(第2.2.2予習課題)。また日ごろの自主勉強の重要性を強調するため、評価において定期試験の配分を下げ、確認テストの配分を高めた(第2.1シラバスおよび方針)。これらの改良は、第1回確認テストにおいて一般教養に関する自主勉強の時間がゼロと答えた人数が昨年度と比較し少なかったことと、春学期を通して日常的に1時間以上の勉強をする学生が現れたことにつながったと考える。また、ノートチェックにおいては、昨年度はほとんど見られなかった設問の周辺まで調べる学生が何名か現れる変化も見られた。上記の改良により、特にもともと勉強する習慣があった学生には、その効果をわずかながらも感じることができた。しかし、全体としては学生の自主的な勉強時間の傾向は昨年度とほぼ同様で、十分な自主勉強が行われたとはいいいにくい。今年度の改良も学生の日ごろの勉強時間の確保にはつながらなかった、と総括する。

また第3回確認テスト時にはテスト前日の勉強さえもしなくなる傾向が見られ、日ごろから勉強するという意識を持続させることができなかった。その一方で、定期試験が近づくとテスト前日は勉強するという学生が増え始めることから、評価の配分にかかわらず、定期試験が近くなるとはじめて自主的な勉強を意識し始めるのは、多くの学生においてきわめて堅固なスタイルであると考えられる。したがって、次年度以降は、日ごろからの自主勉強の必要性に対してさらなる意識喚起の仕掛けが必要と考えら

れる。例えば、途中の8週目などにおいてそれまでの累積点や順位、評価の明示を行い、後半の挽回をうながすことなどである。あるいは、定期試験はやらない（最後のチャンスを与えない）という手段も考えられよう。

また、教員配置の問題から現実的には難しいであろうが、習熟別のクラスの設定、あるいは自主勉強の習慣のある学生どうしでのグループ化は有効と考えられる。これは学力の格差解消の観点というよりは、自主勉強時間の確保の観点においてである。アンケート調査からは、高校時に友人や回りが勉強する環境にあった学生がやはり勉強をする傾向にあり、日ごろから自主勉強に取り組むかどうかは友人・回りがそのようにしているかどうか強く影響する。多くの学生は強い教職希望をもち、そのためにもっと勉強する必要があることを自覚していることから、勉強する群をグループ化することで、お互いに切磋琢磨してもっと勉強する→成績が上がる→一次試験合格者増大の好循環がうまれる可能性は高いと考えられる。逆にいうと、自主勉強を行わない友人が回りを多く占めると、たとえ自主勉強の必要性を自覚しながらも実際にはしないという状況が生まれかねない。今年度の調査においても、高校時代にはほぼ毎日家庭学習を行っていた5名のうち、2名の学生は現在はほぼ自主勉強しないことが明らかになった。学生に十分な勉強時間の確保を促し、学生全体の平均的な学力を高めるためには、まずは、かつては自主勉強していたにもかかわらず、本学への入学後は勉強しない状況に陥ってしまう学生を減らす方策が必要となろう。そのためにはグループ化が良い方法だと考えられる。一方で、もともと日ごろは勉強する習慣がない学生、高校時代から勉強はテスト前のみやるものとしている学生に対しては、グループ化以外の方策を考える必要があるだろうが、現時点でその良い方策はわからない。

今年度は、学修成果の確認を意識して、定期試験の範囲を広くしほぼ実力テストと呼ぶことができるものとした。その結果、教採一次試験合格の目安となる70%正答率に達した学生は事前テストでは0名であったのに対して、定期試験では11名存在した（第6.1）。事前テストでは30%の学生しか解けなかった数学の問題（第6.3）も、定期試験では70%を超える正答率となった。上述どおり、学生の日ごろの勉強時間の確保は十分ではなかったものの、15週間の学修成果はほぼ全員に見られ、一般教養に関する学力を高めることはできたといえよう。逆に言えば、十分な勉強時間を確保できれば、本学生においてももっと多くの学生が目安の70%を超えられるまでの学力に到達するはずと考えられる。

教採問題は、高校入試レベル程度であり、それほど難易度が高いわけではない。本調査からも、半年間の授業において毎日の1時間15分程度の自主勉強時間を確保できれば、十分に教採一般教養はクリアできる程度の難易度ともいえる。すなわち、たかだか1日1時間強の勉強で功奏するわけであり、2年次以降、教職教養、専門教養、面接対策、模擬授業などの教採対策事項が増えていくことを考慮すれば、大学4年間の中の2年次のうちに一般教養に関して合格の目安程度（70%）が取得できる程度までの学力に到達しておくほうが得策である。こういう1日1時間強という勉強量や、正答率は70%まで到達という目安を明示（永遠に勉強する必要はないことを明示）することで、学生のやる気の喚起につながられるかもしれない。

文献

星川佳広 教職演習Ⅱ授業報告 自主勉強時間を増やす試みとそれに影響する要因. 東海学園大学教育研究紀要第2号: 99-112, 2016.